

邦楽

華麗なる

技

11/14(火)

①14:00 / ②18:30 開演
2回公演

第 十三 回

琉球古典芸能

華やぎの声と舞の技

沖繩の伝統楽器「三線」は、琉球王国時代、

士族の男子の嗜好とされ、式楽として演奏されてきました。

歌三線を中心とした音楽が重要な役割を担ってきた琉球古典芸能の魅力に迫ります。



歌三線とは

三線は三味線と同じ構造ですが、皮にはニシキヘビを使っています。また三味線が撥を使うのに対して、琉球の三線は水牛の角でできた爪を人差し指につけて弾くのが特徴です。庶民の音楽から発展した三味線音楽とは異なって、琉球王国の式楽として意味を持つようになった三線は、士族層が用いる高級品でしたが、次第に一般へと普及して民俗芸能にも使われるようになりました。歌い手が弾き語りのように三線を弾きながら歌う歌三線ですが、古典芸能と民謡とは別のものです。

楽劇「組踊」

唱え・所作・音楽が一体となった「組踊」は、「聴くもの」といわれるほど音楽が重要です。音楽の担当は「地謡」といい、歌三線・箏・笛・胡弓・太鼓で構成されています。沖繩古来の芸能や故事を元にして、大和芸能(能・狂言)の影響を受けていると考えられています。舞踊を担当する立場が唱えという台詞にフシをつけた独特の様式を持つ総合演劇です。今回は「華麗なる技」シリーズということで、琉球語による独特の発声法と節回しによる唱えと歌を抜き出して再構成した「語り組踊」の形で、より音楽面を強調しています。最近沖繩でもよく上演されている演出法です。



佐辺良和



仲村逸夫

若手が綴る琉球芸能

幕開けは祝儀曲「かぎやで風節」(沖繩の発音で「かじゃでいふうぶし」)から、女踊や独唱など盛りだくさんです。第一線で活躍する今注目の若手・中堅に登場してもらいます。舞踊の立場を務める佐辺さんは「歌三線をメインとした音楽中心の公演は沖繩でもなかなか無いので、立場として魅力を伝えたい」、歌三線の仲村さんは「前回が師匠の世代、それから19年ぶりということもありプレッシャーがあるが、沖繩の音楽の魅力に加え、若手も育ってきていることも伝えたい」と意気込みも充分。生活の一部としてしっかりと根付いている沖繩の宝物を存分にお楽しみください。



※「日本音楽のかたち(八) 沖繩古典音楽(1998年12月20日)」